

第二部 上越教育大学の取組

①「上越教育大学スタンダード」と「教育実習ルーブリック」

釜田 聡（上越教育大学 教授）

こんにちは。釜田聡と申します。本日はご多用のところご参会いただきましてありがとうございます。早速、時間のほうが押しておりますので、報告させていただきます。

冒頭で高田副学長から特色G P、いわゆる4年間の取組について報告があったかと思えます。第二部では、特色G Pの後半2年間取組んだ質保証について焦点化して報告をいたします。

第二部は、最初に私が上越教育大学スタンダードと上越教育大学スタンダードに密接に関連し作成しました教育実習ルーブリックについて報告をいたします。

次に、本学附属小学校の泉教諭から教育実習ルーブリックに基づいて実習生指導を行った成果について報告をいたします。

最後に、本学学部4年生、及川未希生君が学生の視点から本学のカリキュラム、それから教育実習、それからボランティア等を振り返りながら説明する予定になっております。

それではよろしく願いいたします。

私の報告は、基本的にスクリーンに基づいて報告をいたします。それから適宜お手元の上越教育大学スタンダードと教育実習ルーブリック、その他関連表を参照しながらお聞きいただければと思います。よろしく願いいたします。

最初に言葉の定義をいたします。上越教育大学スタンダードは、正式名称「上越教育大学（上越・妙高地域連携）スタンダード」といいます。この名のとおり、本学とそれから上越市、妙高市が連携して作ったものです。意味・特色は、これは卒業段階の到達目標、先ほど山極先生から「教職実践演習」のお話がありましたが、その到達目標、卒業段階のものを設定しようというものであります。それから本学と上越市、妙高市が2年間の歳月をかけ実践を通じながら作り上げてきたものです。

次は、教育実習ルーブリックについてです。すでに幾つかの大学では教育実習ルーブリックを作成し、実践し

ています。本学の教育実習ルーブリックの特色は、次のとおりです。

初等教育実習3年生、これは全員必修です。

それから中等教育実習4年生、それからここにおける到達目標及び教育実習の評価基準ということで定義をしました。これについても先程のスタンダードと同様に密接不可分の関係にとらえ、本学と上越・妙高市が2年間かけ作成してまいりました。実際に平成20年度にはすでに運用していますが、平成21年度春から教育実習の三者評価の一つの資料として使う予定です。

続きましてスタンダードの内容について説明します。実はこの図のように私たちは捉えています。先ほどから話題になっている「教職実践演習」ですが、これは単なる15コマの授業とは考えておりません。この「教職実践演習」の到達目標、これは先ほどの上越教育大学スタンダードですが、それに基づき、さらなる教員養成カリキュラムの改革への一つのきっかけにしたいと考えています。スタンダードができ、「教職実践演習」は試行2年目ですが、そうしたものの改革と併せて、もう一度1年次からのカリキュラムを見直そうと考えています。

その際、上越教育大学の特色あるプログラム、平成17年に特色G Pを採択した時の一つの特色あるプログラムの分離方式初等教育実習、それから教育実地研究Ⅱですとか、そうしたものをここに還元させていこうと考えています。

具体的には4年次の「教職実践演習」と各学年段階に体系的に位置づけられている教育実習、まずこれを縦軸として考えています。それから同じく教育実習の事前指導にあたる教育実地研究Ⅱ、これは2年次必修にあたるものですが、これを私たちはミニ「教職実践演習」と捉



えています。ということは結果的に4年生の「教職実践演習」、3年生、4年生の教育実習、それから2年生のミニ「教職実践演習」ということになり、質保証のための中核的な授業科目になると考えています。

それから4番目、これは本学の特色だろうと思います。上越市と妙高市と協働しスタンダードを作り上げました。また教育実習のループリックも上越市と妙高市とで作上げてきました。

なぜそうしたスタンダードとループリックが必要になったかという点、「教職実践演習」が始まるからという外圧的な理由だけでなく、本学ならではのいろいろな課題が要因として挙げられます。それについて説明いたします。

平成10年、11年、12年とカリキュラム開発を行い、それぞれ特色あるプログラムができましたが、最終的にここに書いてあるように教育実習改革が必要になりました。学生が主体的に取り組む教育実習に改革する必要があると考え、カリキュラム改革を行い、その成果が平成17年に特色GP採択ということで認められました。

実はそのあとの教育実習ですが、さらに大きな課題が出てきました。例えば、受入校からは、「教育実習の評価が不明確である。学校間格差がある」などの問題点が指摘されました。学生からは、「教育実習で具体的にどこをどう頑張ったらいいかということがよくわからない。評価の基準が明示されていない」などの疑問や不安が寄せられるようになりました。別の課題としては、私たちの大学では上越市、妙高市に多くの学生が出身しています。その中でさらに学生数が増大することになりました。小学校は毎年160名出ていましたが、ここに免許プログラムの学生が100名加わりました。さらに教職大学院が1年に50名ですから、2年で約100名、そんな形で次々に上越市・妙高市に学生が入っていくこととなります。従来からのこの課題を何とか解決していくにはそうした実習生の質的な保証、いわゆる2年生の終了段階で、ある程度の力量形成をする必要がある。そして、その力量について大学と受入校とが共通理解する必要があるということで、内側からの質保証の要求が高まっていました。

それから外側からはご存知のように、平成17年12月の中教審の中間報告で「教職実践演習」の必修化、あるいは実習の厳格化、つまり力量不足の学生は外へ出すなどという厳しい提言があったかと思えます。

こうしたことを受け、上越教育大学スタンダード、それから教育実習ループリックを作るに至りました。

それでは、ここで分離方式の初等教育実習の説明をします。

分離方式初等教育実習では、3年次の5月に1週間観察実習に出向きます。それから9月の半ばから3週間、同じ学校、同じ学年、同じクラスに出向きます。この5月から9月までの半年間を私たちは、研究期間と捉えています。学生は最初の1週間に子どもたちと出会い、それから担当教諭から指導を受け、秋の詳細な内容について説明を受けます。学生は大学に戻ってきてその子どもたちの顔や先生からの指導を思い浮かべながら、この4ヵ月間で指導案を作ります。私たちは、これらを分離方式初等教育実習と呼んでいます。

こうした分離方式初等教育実習を3年生に位置づけ、4年間の体系的な教育実習のシステムを作っているところです。具体的には1年生、観察参加実習、この段階で本学のスタンダードに照らし合わせた指標を私たちは作っておりますので、学生はそれを見ながら1年生なりに卒業段階の目標を見通し自己課題を見出していく場を作っています。

2年生では同じく先ほどのミニ「教職実践演習」といわれている教育実地研究Ⅱ、ここで中間チェックを行っています。

3年生では教育実習ループリックに基づきながら、スタンダードを見据えた実習がここで行われてきます。

最後4年生、「教職実践演習」はまだ選択授業ですが、数年後にはこれが必修授業として、全員が履修することになります。ここでは中等教育実習、総合インターンシップ等も入っていますが、4年間トータルとしてこのスタンダードに基づいた縦軸が現在できつつあるというところです。

先ほどミニ「教職実践演習」といいました教育実地研究Ⅱですが、概要について簡単に説明します。2年次、学部生160名、免許プログラム100名、260名いるわけですが、おおよそ少人数グループで取り組んでいます。一クラス10名から20名程度です。本日会場の後方に、学生がいますが、今年一生懸命取り組んだ学生たちです。

授業の内容は、スタンダードの内容に関連させています。板書の基本、書き順、筆順、止め、はねも入っております。それから授業づくりの基本ということで、いく

つかの教科の授業づくりの基本があります。それからグループワークの基本、資料の活用の仕方など、基礎的なことをここで学んでいきます。

最後ですが、3年生の教育実習、それから2年生のこの教育実地研究Ⅱの確認テストと補充指導の橋渡し役ということで、教職キャリアガイダンスを行っています。160名の学部学生全員と免許Pの院生100名を対象に行っています。

スタンダードができ、教育実習ルーブリックができると、力量が明示化されます。その点、学生たちにしてみますと自分の力量が劣っている部分が明確になります。最近、そうしたことで、過度に悩む学生も出てきました。

それについて、私たちもできるだけ細やかに学生指導にあたろうと、学生一人一人と面談をしながら、可能な限り相談に乗っていこうと手立てを講じています（教職キャリアガイダンス）。

私たちのスタンダードの作り方ですが、次のとおりです。

中教審から発表された各事項は、次のとおりです（パワーポイント資料）。

私たちは、上越教育大学スタンダードの作成にあたり、これらの中教審の到達目標を基盤としました。さらに本学の教育理念、具体的にはアドミッションポリシー、それから大学憲章、本学や地域の教育現場の状況、本学学生の状況を勘案して作成をしました。

お手元のスタンダードA4・1枚のものをご覧ください。スタンダード案となっておりますが、一番上のほうに1番から4番まで横軸にそれぞれ事項が記述されています。これらについては「教職実践演習」の到達目標で示されているものです。その下の到達目標、それぞれの事項に応じて1番から3番まで縦軸にずっと並んでいるかと思いますが、これも基本的に「教職実践演習」の到達目標をそのまま受けております。それから一番下のそれぞれ4番と書かれているところですが、これが本学の教育理念を反映したものです。

例えば1番の4、「反省的实践を営む基本的な姿勢」は、まさに教員の基盤だと思っております。4年間の大学生活、一生を通じて、これらの資質能力をすべてマスターすることは困難かもしれません。あくまでもここでは反省的实践を営む基本的な姿勢、これから独り立ちしていく教員としてどういう力が必要なのかということを示

かにしながら、これを盛り込んでいこうということによって位置づけてあります。

それから2番の4も同じことです。教員のコミュニケーション不足が問題視されています。本学では、比較的多くの学生が、率先して地域社会に出ています。それから上越市、妙高市からのボランティアの要請も非常に多い現状です。こうしたボランティア、それから地域に出っていくこともスタンダードに盛り込みました。

同じく3番、4番についてもそうした教育理念を反映したものを、それぞれ最後の4番の青文字のところで位置づけました。説明については、省略いたします。

教育実習ルーブリックは、このスタンダードと密接不可分なものとして私たちは作成しました。平成21年度から、すべての小中学校で完全実施となります。

続いて、3年生以上で使う教育実習ルーブリックの項目について簡単に説明します。この項目の1については実は上越教育大学スタンダード、いわゆる「教職実践演習」の到達目標の枠組みです。そこに中項目を起こして、ファーストステージ、セカンドステージ、サードステージと置き換えました。

このファーストステージが学生にとっては大きなハードルになります。具体的には、学生に対して「教育実習に出る前、3年生の春の段階までにこのファーストステージまで到達しなさい」と指導しています。私たち教員側にとっては、何とかそういう力をつけさせようということでカリキュラムの工夫をしています。

それからセカンドステージのところについては、受入校の先生方とも相談をしながら、何とか教育実習で学生たちをここまで伸ばしたい。あるいは到達させたいということで今、合意形成しているところであります。

サードステージについては一部の学生がそこに行くことはあるだろうけど、学生全員がサードステージまで到達するのは無理があるだろう。一つの目標としたらどうかということによって設定しました。

3年生春から3年生秋までを見通していった時に、これらの教育実習ルーブリックがどういう意味付けになるかということ、上越教育大学が地域の受入校に責任を負うということになります。それから上越教育大学は学生に対して基本的な資質能力を育成し、その力量を確認した上で地域の学校に送り出すという責務もあります。地域にもあるし、学生に対しても私たち教員が頑張りますよという一つのメッセージの意味合いがあります。

それから地域の学校と今現在合意された資質能力については、この1番と2番のあたり、いわゆる秋の教育実習に行く前までに何とかこのファーストステージの段階に全員引き上げてほしい。私たちもそういう指導をする。学生自身もそういう意味で取り組んでほしいということと呼びかけております。私たちは、秋の本実習が終わった段階で教育実習ルーブリックのセカンドステージの段階まで何とか到達してほしいという願いがあります。これはすべての学生です。全員ということですから非常に厳しい目標になりますが、これらに基づきながらファースト、セカンドと学生の力量を底上げするため、私たちが精一杯やっけていこうと決意した次第です。

続きましてこれらを4年間に置き換えるとどういうことになるかということを見ていただければと思います。1年生の秋、1年生は教育実習、教育観察も終わります。このあたりで、1回、教職とは何かということ総括する。その段階で教職キャリアガイダンスをしながら4年間、あるいは将来の教職生活というのを見据えて大学における自己目標をしっかりとってもらいたいという意味合いがあります。

それから2年生の教育実地研究Ⅱに、補充指導等もありますが、「いよいよ教育実習へ行く最終チェックですよ」という意味があります。3年生、初等教育実習で地域と大学で学生を鍛えていくということです。最後4年生の最終段階で上越教育大学スタンダードの到達目標である「教職実践演習」を一つの指針として、すべての学生の力量を確認・補充していこうということです。

上越教育大学が今度は社会に対してその品質保証するといった大変言葉は悪いですが、質保証、学生の力量について保証する。それから3年生、2年生の段階は主に学生に対して基本的な資質能力を育成し、その力量を確認した上で上越・妙高地域に学生を送り出すという大学としての責任があるかと思えます。

本学のカリキュラム上に上越教育大学のスタンダードを置きました。いわゆる「教職実践演習」の到達目標です。将来的にはこの枠組みの中に他の授業科目の到達目標が位置づいていくだろうと思います。今現在この「教職実践演習」とそれから特色GPで評価をされた関連科目の到達目標ができています。今後これらについては、さらなる拡充ということが当然求められますし、そうした意味で全学体制の質保証の取組が今後の課題になります。このように今現在4年間の特色G

Pの成果としてお示しするところまでまいりました。

最後になります。今学内の話をしましたが、やはり上越・妙高地域、教育実習、それからボランティア等々で学生が力をつけております。先ほどのスタンダードは実は学内にとどまることなく次のように考えています。

今現在スタンダードに基づいて1年生から4年生まで縦の関連が図られています。今後は教職関連科目、それから専門科目群がこのスタンダードをどれだけ意識し、関連付けることができるかがこれからの課題です。500名を超える学生が地域にボランティアとして出ています。こうした学生たちも、それから地域の受け入れ先もこの本学のスタンダードを意識しながら、学生の資質能力の育成のための支援をしていただくということが今後の一つの課題になります。また、これらが一体となることによって学生がフレンドシップ事業で培った力、学内のいろんな授業科目で学んだ力、それらを統合し、この上越・妙高地域をフィールドとしながら、4年生最後のスタンダードに向かって一人一人が目標をもち学んでいくという、そういうカリキュラム、支援体制を作っていくことが私たちの課題かと思えます。

今日十分な説明ができませんでしたが、そうした条件整備は、この4年間の特色GPでかなり進んだと思えます。

学生は入学当初から教職キャリアファイルを活用し、多様な学びの履歴をそこに綴っていきます。そうした学びの履歴を各学年ごとで振り返っていくという形が今できております。今後はそれらをさらに有効に活用し、各授業科目、さらには地域にその輪を広げていくというのが私たちの課題です。

以上で、説明を終わらせていただきます。